



先生たちの声でよりよい学校へ

県立千葉女子高等学校長 かまやち 釜范 なるゆき 德行



1 はじめに

本校は、明治33年（1900年）に千葉県で最初の高等女学校として創立され、今年度で122年目を迎える伝統校である。創立以来、千葉県における女子教育の殿堂として、輝かしい歴史を誇るとともに、本校を巣立っていった卒業生は3万2千名を超え、慎ましく、たおやかで才知溢れる方々が、地域社会のみならず、国の内外で活躍している。

2 「学校を創る」の執筆に当たっての考え

本校に校長として着任して今年度で3年目となる。外から見ると千葉女子高校は歴史と伝統をもつ課題のない学校と思われがちであるが、日々、様々な課題に対応している。今回、執筆に当たり、千葉女子高校のよいところ（正の部分）だけでは多くの方々の参考とはならないと考え、敢えて、本校の課題（負の部分）も紹介する。そうすることで、「学校を創る」の執筆の意図を御理解いただければと思う。

3 本校のよいところ（正の部分）

千葉女子高校のよいところはたくさんあるが、ここでは、県立高校としては比較的優れていると思われる取組について3点紹介する。

(1) 活発な地域との連携事業

地域とのつながりを大切に、更に地域から愛される千葉女子を目指し、地域との連携事業に積極的に取り組んでいる。

実施事業は78本、延べ4268人の生徒が参加

した（令和元年度実績）。なお、現在はコロナ禍により制限・縮小している。

① 部活での地域との連携等 …40本

韓国音楽高校生とのコンサートや千葉刑務所矯正展、稲毛駅120周年でのコラボ等



稲毛駅120周年イベント チアリーダー部

② 家政科や学年による連携等 …27本

県庁食堂特別メニューやハウス食品・マミーマートとレシピ開発、高齢施設作品展等

③ 高大連携、近隣の小中との連携等 …11本

小学校・特別支援学校・保育園・学童保育への実習活動、千葉大・東邦大・和洋女子大との連携事業等

(2) コロナ禍における休校時の取組

令和2年度の休校期間中に、生徒への学習支援として、自作の授業動画やPDFの学習解説を作成し、 유튜브へアップした。

⇒動画254本、PDF84本 合計338本

動画視聴回数 約55,000回

教員たちの熱意が生徒に伝わり、高い視聴回数を記録した。これらの取組が県教委に評価され、令和2年度「魅力ある県立学校づくり大賞」の優秀賞に輝いた。

(3)学校評価アンケート

毎年行っているアンケートでは、昨年度、保護者の方々から高い評価をいただいた。

「子どもを千葉女子に入学させてよかった」

⇒保護者回答 95.2%（令和2年度）

4 課題への取組（負の部分）

本校に着任後、「本校のここは改善した方がよい」という声が多く、先生方からあった。長い歴史の中で培われてきた慣行もあるが、より学校をよくしたい職員の思いである。

(1)課題対応として職員アンケートの実施

職員の声に耳を傾け、改善に向けて職員アンケートを断行した。その後、10回の主任会議と8回の職員会議を経て合意形成を得て、52項目の改善を行った。

①アンケートの内容

- | | |
|-----|-----------------------|
| Q 1 | 不要だと思われる業務を記してください。 |
| Q 2 | その理由をお答えください。 |
| Q 3 | 改善・効率化が可能な業務を記してください。 |
| Q 4 | その理由をお答えください。 |
| Q 5 | 改善策・変更方法を具体的に記してください。 |

集約方法：Microsoft Formsを活用

②アンケートで改善した内容の一部

- ・始業開始時間を超える朝の職員打合せ
⇒結果：ICT化によりTeamsを活用する。
朝会での板書を廃止した。8：30の始業開始超えが、2回/週→0回/週 となった。
- ・若手の部活顧問の負荷
⇒結果：生徒の活動に支障のない範囲で、38部活を30部活へ統廃合した。これにより顧問15人分を削減した。
- ・考査欠席生徒の追試が各教科ごとに曖昧
⇒結果：内規を改訂、教務部が全てを統括。
- ・教育実習生の各教科3名の枠の撤廃
⇒結果：教員基礎コースを有する学校とし

て、その責から教科枠は設けず、可能な限り受け入れることとする。

- ・職員会議資料の印刷、配付が大変

⇒結果：ペーパーレス化とする。ノートパソコンを会議に持参する。

(2)次期主任の早期発表

次年度の主任発表は、通常の高校では3月が一般的であるが、本校では令和3年1月7日に行った。時期を早めることで3学期を次年度0学期として捉え、前任者から業務を引き継ぎ、1月から準備を進め、4月からスタートダッシュで取り組んでもらうためである。

(3)新しい時代の幕開け、制服の変更

制服を令和4年度入学生から変更することとした。昭和28年度以来、70年目のモデルチェンジである。ジェンダーレスとしてスラックスを導入、スカートとともにバランスがとれたデザインとした。なお、変更に当たっては在校生の声を反映した。生徒アンケートでは「制服を変えた方がよい」が74%もあり、職員アンケートでも今のままでよいが6%と少数であった。保護者の方々にはPTA総会で説明するとともに、松籟会（同窓会）の方々にも同窓会総会にて御理解をいただいた。

5 おわりに

千葉女子高校は課題のない学校と認識されがちであるが、そうではないことをお分かりいただけたと思う。長い歴史と伝統があっても、変えることは変えていく。自分の在任期間に変化の様子を見ることができなくても、これからの生徒のために、ひとつひとつ取り組んでいくことが大切である。最後に私の好きなことわざを御紹介する。

「**老人が木を植えてもその木陰に座ることはない**と知っているとき、**社会は偉大な成長を遂げる**」～ギリシャのことわざ～



中学校の教頭になって ～現状の把握と課題への対応～

東金市立東金中学校教頭 たなべ あきこ 田邊 暁子



1 東金中学校について

本校は、千葉県のほぼ中心に位置し、市内にある4中学校のうち一番規模の大きな学校である。学級数は17学級、在籍518名。区域外からの就学者も増加してきている。

生徒は明るく純朴であり、清掃等の勤労体験や運動会・合唱コンクールなどの学校行事にも大変意欲的に取り組むことができる。一方、基本的生活習慣の確立や規範意識の向上、長期欠席生徒の解消や学力向上等が課題となっている。

本校は今年、創立50周年を迎えた。保護者や祖父母が卒業生の場合も多いため、学校教育全般に対しての関心が高く、理解・協力体制が図られている。また、最近では保護者のニーズが多様化し、様々な意見が寄せられるようになり、開かれた学校づくりや説明責任がより一層重要になってきている。

地域の期待も大きく、地域と協働した学校づくりも急務である。

保護者や地域の声を把握しながら、信頼され、安心される学校づくりが今後必要となっている。

2 着任して感じたこと

私自身がもともと高等学校での勤務がほとんどであり、さらに県教育委員会からの着任であったためか、思いのほか違和感を感じた。着任前、誰もが口々に「文化が違うから、きっと大変だよ。でも、先生方はみんなよく動いてくれるよ。」と、私に伝えてくれた。

いざ着任してみると、職員玄関には歓迎の言葉と、机には花とメッセージカードが。歓迎していただいたことに感動しつつも、このために先生方は時間を割いてくれたのか、これまでの職場では体験がなかったので、これも「文化」なのか、と考えてしまった。

昨年度は新学期早々、すぐに新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休校が始まった。はじめの1か月は、生徒の自宅での学習のための課題を作成したり、教材研究をしたりして先生方は過ごしていたが、5月は分散登校を行うこととなった。教科書や課題を渡すところから一苦労だったが、渡す教科書も与える課題も、まずは5教科ということに驚いた。受験に必要なだから仕方ないという学校全体の空気感に少なからずショックを受けた。私が家庭科の教員だからなおさら感じたのかもしれないが、どの教科も同じように大切なのではないのかと感じた。

3 本校の強み

本校は、市職の先生を含めて45名が在籍し、平均年齢は41.4歳と大変若い。ここ数年、連続して初任者が着任しているため、若手職員が多い。一方で、ベテラン教師も多く、年齢層の二極化も進行している。そんな中、30歳台の中堅層がキーパーソンとして活躍してくれている。職場の雰囲気を穏やかにする役割も果たしてくれているだけでなく、若手教員がOJTの流れの中で様々な学びをしやすくなるよう声掛けなどをしてきている。生徒

や保護者との関わり方など、若手教員たちは、先輩教員のやり方を間近で見ながら、必要に応じてアドバイスをもらい、自身の成長につなげている。教頭として、中堅層の職員に対しての適切な働きかけや指導助言を行うことで、いずれ彼らが主任層になるための重要なタスクとなると感じている。

4 本校の課題

日々、コロナウイルス感染予防を図りながら、先生方は授業や部活動、様々な行事のための準備を、時間を惜しまず行っている。特に学級開きの際は、生徒の喜ぶ顔を想像しつつ先生方が競い合うように工夫を凝らしていた。当然だが凝れば凝るほど時間がかかる。さらに毎日、「生活ノート」を生徒とのコミュニケーションツールとして活用し、学級だよりを毎週作る、そんな先生方を見ていて、ある程度の線引きをする必要があるのではないか、「働き方」への意識改革が必要だと痛感した。特に若手職員の退勤時間については改善が必要である。遅くまで職場にいることに何も疑問を感じない集団になってはいけない、という意識を再度全職員で共有する必要があると感じた。

5 with コロナの中で

昨年度は臨時休校が2か月間あり、再開に当たって生徒を学校に安全に迎え入れるための様々な対応が求められた。検温、消毒（手洗い）をどうするか、教室の座席間の距離はどうかなど、職員全員で確認し合った。また、それまで本校は給食の給仕の際、当番にエプロン等を着用させないでいたため、これを機に三角巾、白衣やエプロンを着用して実施することとした。栄養教諭を中心にマニュアルの作成に着手し、実際に職員研修でシ

ミュレーションをしながら、より現実に即したマニュアルを作成した。さらに、画像処理の得意な教員で研修用動画を作成し、生徒も今年度着任した職員も動画を視聴することで共通の流れを理解し、実践することができている。

行事等についても、内容や実施方法の一つずつ見直し、精選しながら密にならないような配慮をした上で実施している。特に昨年度は、密を防ぐための配慮から、保護者の方々に生徒の様子を参観していただく機会をもつことができなかったため、今年度については参観方法を工夫し、実施することができた。

さらに現在は、今年度から導入されたGIGAスクール構想のもとで、生徒一人に一台のタブレットが配付された。生徒の学びの保障のために、どんな状況においても様々なスタイルで学ぶことができるよう、今年度新たな分掌にGIGA担当を設置し、GIGA主任を中心に生徒への支援や、職員の技能向上に向け、研修の機会を設けたり情報提供などをしたりして、学び続ける職員集団として、全体の底上げを目指す。

6 おわりに

今回、執筆のお話をいただき、私自身教頭として何ができたかを振り返り、今後どうすべきかを考える良い機会となった。実際に、私が実践したことといえば、自ら進んで気持ちのよい挨拶、気になる職員への声掛け、そして、笑顔でいることである。

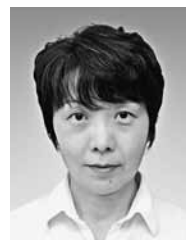
中学校は、本当に忙しいところだ。先生方が心身ともに健康で、何事に対しても前向きに取り組むことができるようサポートすることが私の役目である。今年度の後半に向け、生徒、職員のために何をすべきか整理し、丁寧に、楽しみながら実践していきたい。



人が動く学校を目指して

市原市立五井中学校教頭（前市原市立三和中学校主幹教諭）

くまもと みゆき
隈元 美幸



1 はじめに

私は前任校での4年間の勤務のうち、1年目は進路指導主事・副教務として、2年目からは教務主任として、最後の1年間は主幹教諭として学校運営に関わった。以下はその実践例である。

2 組織の活性化のために心がけたこと

(1)連絡と調整

主任会、生徒指導部会、教育相談部会を時間割に位置付け、週に1度必ず実施した。行事や授業変更等で開けなかった場合でも各担当から情報を収集し、文書で情報を共有した。

月予定や週報が完全な状態ではなく8割程度であっても、早めの提示をすることにより、見通しをもつことができるのでお互いの安心感が生まれる。特に昨年度のスタートの時期の休校や分散登校では、前例がなかったため、職員で話合いの時間を確保することで、学校の状況に応じた柔軟な対応ができたのではないかと思う。

(2)担任、学年のサポート

教育相談コーディネーターとして、別室登校対応の職員割り振りや生徒対応をした。個別に支援が必要な生徒に対しては、担任とともに家庭訪問をし、保護者面談に参加した。SC、スクールカウンセラーアシスタントとの連携はもちろんのこと、ケースによっては関係機関にも相談し、組織としての対応を心がけた。

(3)タイムリーな校内研修の実施

令和元年10月の暴風雨により、校庭の大木が倒れ、昇降口のガラスが割れ、校舎内が浸

水する大きな被害を受けた。生徒の引渡しや学校が避難所となる等、初めての経験であった。学校立地の特性として風水害に弱いということを全職員が身をもって感じた。子供の安全面に関わることで、年度末の異動により職員が変わっても、当時の教訓が今後に生かせるようにと校内研修を行った。

3 コロナ禍に思うこと

令和元年度までは学校行事、PTA活動、地域との関わり等、通常どおり実施できていた。しかし、それらの行事が中止や縮小となり、実際に職員や子供の動きを踏まえての引継ぎができていない状況である。特に学校独自の取組には歴史があり、子供の活動を通して教職員も学ぶことが多い。本来であれば年度の終わりに職員間で引継ぎをする予定であった。コロナが収束し、元の学校生活が戻ったときに、学校として新たにどう取り組んでいくかが課題であると感じている。

4 おわりに

最近読んだ本の中に、聞き手への伝わり方のレベルとして、相手が話したことが頭で分かっている、把握しているが「理解」、理解しただけでなく、なるほど・確かにといった感情が沸いているのが「納得」、さらに自分なりの考えを加え、自分にできないのが「共感・共鳴」とあった。

自分の思いを伝える言葉を大事にしながら、「教職員のチーム力で子供を育てる」学校を目指して今後も職務に邁進していきたい。



これからの社会で活躍できる 生徒の育成のために

八千代市立八千代中学校教諭 あき ゆりこ
安藝 由里子

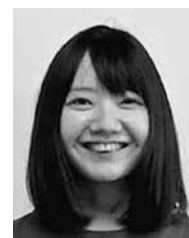


私は教員になる前、民間企業に勤務していた。社会人として、様々な人と交流する中で、「これからの社会で活躍するためには、コミュニケーション能力を高めること」がとても大切であるということを学んだ。いつしか私は、「コミュニケーション能力を身に付け、これからの社会で大いに活躍できる生徒を育てたい」と考えるようになり、教員に転職することを決意した。昨年度、中学校に理科教諭として着任した。授業の中でコミュニケーション能力を育てるために、実験グループの人数や発表の場面設定を工夫し、他者に伝えることの大切さを指導してきた。本年度は、昨年度の実践を踏まえ、伝える側だけでなく、話を聞く側の姿勢の指導にも力を入れている。コミュニケーションは、言葉だけで行われるものではない。目の動きや動作、表情も含めてコミュニケーションが成立する。そのため、話を聞くときに、うなずいたり、微笑んだりすることもコミュニケーションの第一歩であると考えている。授業の中では、必ず発表する場面を設け、話を聞く姿勢を指導し、意見交換の場を設け、他者と関わる時間を大切にしている。本年度の最終目標は、相手の意見をよく聞き、自分自身の意見とすり合わせ、他者とのやりとりの中から新しい考えを生み出すことのできる生徒を育てることである。今後も、生徒同士の関わりを大切に、コミュニケーション能力を高め、将来、社会で活躍できる生徒を育てていきたいと考えている。



見えない悩みに気付くために

県立船橋芝山高等学校教諭 たかはし しょうこ
高橋 松子



教諭として2年目の今年度、初めて高等学校で学級担任を務めている。講師経験の半分は、特別支援教育に携わってきたが、担任として生徒と接する中で、その経験の全てが生きて感じる場面が多い。

どのような学校でも、多様な特性をもつ生徒がいる。50分間座っていることが難しい、こだわりが強い、大勢の前で言葉を発することができない……。そうしたことで悩んでいる生徒は多い。かく言う私も、長時間の着席は落ち着かないし、大きな音やざわざわした環境にいるのは今でも逃げ出したくなるほど苦手で、残念ながら滑舌も良くない。でも、良いところも実はある。みんながそれぞれの得意と不得意をもっている。

講師をはじめた頃、「教員としてやりたいこと」がいつもすぐに答えられなかった。何のために？と考えると、歯切れが悪くなった。それは自分の弱みだと感じていた。そのまま様々な環境で講師を続けるうちに「生徒に安心を与えたい」と強く願うようになった。この目標は、どんな校種でもどんな学校でも一貫して持続できる。そう考えるようになった年の採用選考で、初めて二次選考に合格した。生徒の見えない悩みに気付きたい。日々を安心して過ごしてほしい。そのために教員として何ができるかを考え、与えられたチャンスを大切に生徒たちの心に寄り添っていききたい。



あ び しょく 我孫食プロジェクト ～体験はすべての礎 地域とともに学び、 つながる総合的な学習 3年間の歩み～

柏市立風早南部小学校教諭（前我孫子市立新木小学校教諭） 伊藤 陽介



1 「我孫食プロジェクト」とは

「手賀沼の東方の新木野は 風清らかに 溢れる光」に始まる校歌。新木小学校は、学区が田畑に囲まれ、利根川や手賀沼を身近に感じられる自然豊かな学校である。

5年生の社会科「米づくりのさかんな地域」の単元で、子供たちは、庄内平野を題材に学習した。しかし、自分たちの身近な地域でも米づくりをしているのに、誰がどのように生産しているのかは、ほとんど知らないということに気付いた。そこで、我孫子市の農業について調べてみると、農業が我孫子市の主たる産業であることや多くの人が我孫子の農業を支えていることを知った。

そこで「我孫子の農業のすばらしさをさらに多くの人に発信したい」という願いのもと、「農業による地域活性化」を目指してスタートしたのが「我孫食プロジェクト」である。

2 「我孫食プロジェクト」の歩み

(1) 1年目 ～5年生 我孫食PRし隊～

我孫子の農業について知るため、我孫子市役所農政課の方や地元の農家の方を招いて、講話会を行った。また、学校の近くの直売所やスーパーマーケットの地産地消コーナーを見学した。実際に農業に携わる方々との出会いを通して、子供たちは我孫子市の農業への理解を深めた。また、学んだことを多くの人に伝えたいと、PRキャラクターを作ったり、市内の公共施設にパンフレットを置いたり、PR動画を作って市や学校のホームページで

発信したりした。

(2) 2年目 ～6年生 我孫食づくり隊～

持ち上がって担任した6年生。前年度の経験がある子供たち自身の「今年は自分たちで野菜を作りたい!」という意欲から今年度の総合的な学習がスタートした。

地域の農家の方の指導の下、我孫子市内で盛んに作られているトマトの栽培を行った。児童は無農薬にこだわり、毎日当番を決めて観察、害虫の駆除を手作業で地道に続けた結果、おいしいトマトが実った。



収穫したトマトは、給食に出したり、ジャムに加工して地域の方に販売したりして我孫子産野菜のPRを行った。

しかし、それでも我孫子産野菜の魅力が市内に広がっていないことに子供たちは悩んだ。そこで、自分たちのPR活動だけでなく、市長に政策を提言することで、市の農業を活性化させられるのではないかと考えた。

国語科「パネルディスカッションをしよう」「意見文を書こう」の単元と総合の学びを関連付け、87人全員が提言文を作成し、「未来

の我孫子の農業活性化プラン」として星野我孫子市長へ手渡した。



(3) 3年目 ～6年生 我孫食伝え隊～

「卒業した先輩の思いを受け継ごう」と、新6年生の総合的な学習がスタートした。

2か月の休校が明けた6月、早速トマトの苗植えを行った。トマトの苗の費用などは、前年度の先輩の販売活動の収益金から捻出した。夏には、37kgのトマトを収穫することができた。そして、客層や価格、販売個数などの観点を比較しながら話し合い、今年度はケチャップに加工することに決めた。

しかし、子供たちは、ケチャップ作りの調べ学習を進める中で、ケチャップ販売には、食品衛生法に基づく許可がいることや「JAS規格」の基準を満たさないといけないことに気付いた。そこで、千葉県内の加工品関連会社に手当たり次第連絡をすると、最後に柏市の加工品製造会社にたどりつき、ケチャップ製造を委託することができた。

ケチャップのレシピは、JAS規格をもとに、自分たちで3種類の味を作り出し、学年全員で食べ比べをして決定した。また、ケチャップの販売価格は、身近なお店で売られている値段やここまでの製造にかかった費用などをもとにして考えた。価格決定の話合いでは、算数「データの調べ方」の学習を関連付けた。各クラスで出た案をもとに、最後は総合実行

委員会で協議し価格を決定した。

あとは販売のみというところで難局に突き当たった。コロナ禍でバザーや地域のお祭りで売ることができなくなった。そこで販売場所として、高齢化のために休業している学校のすぐ近くの直売所を借り受けた。看板や店内のレイアウトなど、自分たちの手で改装した。また商品のラベル作りやポスター作りなど、学年全員で出店準備を分担し、ついに直売所を開店することができた。



当日は、開店前から行列ができ、午前中だけで約160個が完売、訪れた多くの方々に自分たちの思いを届けることができた。

3 「我孫食プロジェクト」を通して

この学習を通して、児童は、地元の農家のすごさ、働くことの大変さや魅力、自分たちの暮らす地域のよさに気付いた。この3年間、教師も児童も、市役所や地域の農家の方々など、たくさんの方と出会い、ともに学んできた。コロナ禍だからこそ、人とのつながりが一層温かく感じられた。学習に協力して下さった地域の方々への感謝の気持ちを忘れず、今後も地域を愛し、支えていく子供たちを育てる総合的な学習を大切にしていきたい。



子供の目が輝く図画工作科の実践

成田市立成田小学校教諭 やまだ ゆみ 山田 優美



1 はじめに

本校は、2020年度全国造形教育研究大会千葉大会の研究校として、3年間図画工作科の研究を重ねてきた。新型コロナウイルス感染拡大により、やむを得ず全国での発表は中止となったが、自主公開の形で研究のまとめを行った。自分自身この3年間で、講師の先生方からの指導を仰ぐことができ、多くの財産となった。わずかではあるが、図画工作科という教科の魅力について知り得たことを紹介したい。

2 研究主題

本校の研究主題は「自分の思いを表現し、共に作り出す喜びを味わう児童の育成～造形活動を通して～」である。そのために、児童の育成する資質・能力を明確にし、指導の改善に生かす題材開発と授業改善の工夫に取り組んだ。

3 図画工作科のねらい

図画工作科の指導をする際、私たちはどのような指導をすればよいのか。子供が喜んで楽しく自分の好きな絵を描けばよいのか。教育現場にしながら、そのような迷いをもつ先生方もいるだろう。当然のことながら、図画工作科は教科である。そこには、図画工作科で身に付けさせたい力があり、目指すべき目標がある。改めて図画工作科の目標を見ると、『造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能

力を育成する』とある。つまり、物事を形や色などの視点で捉え、意味や価値をつくりだす力を育てることを教師側も意識して、授業を行うことが大切であることがわかる。

4 授業の実践

(1)導入の工夫

① 材料との出合わせ方

1学年『はことはこをくみあわせて』の単元では、様々な形の箱を山のように用意したことで、子供たちは「わあ」と驚きの声を上げた。それらの箱を積み上げたり、転がしたり自由に触らせる中で、それぞれの箱の形の特徴に気付かせ、仲間分けをさせていった。さらに、活動の途中でも、箱を換えたり、新たな箱を追加したりできるよう『どうぞのコーナー』を作り、自由に使えるようにした。

② おためしタイム

単元の内容にもよるが、導入で材料との出会いの後は、『おためしタイム』を設定することが多い。その単元で使う材料のもつ可能性を引き出させるため、時間を決めて、お試しの活動をさせてみる。例えば、薄葉紙を使った活動では、1枚の薄葉紙を渡し、手触りや感覚などを楽しんだ後、どんなことができるかやってみる。子供たちは「くしゃくしゃにする」「まるめる」「ちぎる」「さく」「しぼる」など様々な言葉を使って表現する。友達とそれらを共有した後、時間と材料をたっぷりと与えて、活動に入るようにした。子供たちが本時のねらいを意識しながら、「自分もやっ

てみたい」とさらに意欲をもって活動に取り組むことができた。

(2)活動の場の工夫

2学年では、カラーセロハンを窓などに付けて、透明の世界を楽しむ活動を行った。子供たちに「どこに飾りたいか」を尋ね、教室以外にも、昇降口や廊下、その他透明のビニル傘にも飾りを付けた。カラーセロハンを置く場所は、固定し、それを取りに来る際には、必ず友達の活動が目に入るようにした。友達の活動を見て自分の活動に取り入れたり、友達に声掛けをしたりなど、鑑賞と表現活動が、同じ時間に繰り広げられていた。



廊下の窓への飾りつけ

また、1学年『うきうきすいぞくかん』では、子供たちがつくったもので十分遊べる場所を確保した。教室にワイヤーを張って生き物をつるしたり、ブルーシートを水場に見立てて泳がせたりすることにより、イメージが膨らみ、「もっとこうしたい。」という表現の欲求が高まっていった。



ブルーシートで遊ぶ場

(3)ねらいに応じた教師の働きかけ

導入時には、子供たちに本時のめあてとして「いろいろためしてみよう」「どんなことができるかな」などと投げ掛け、1時間を通してめあてを意識させた活動や声掛けをするようにした。本時のねらいを子供たちにも明確にし、子供たちに付けさせたい力を意識して授業を行った。活動中には、「上手だね」というあいまいな言葉ではなく、「こんなことができたんだね」「ためして、見つけたんだね」などの声掛けをするようにした。鑑賞タイムでは、そのような視点で子供同士も評価しあう姿が見られた。

5 おわりに

3年間の研究を経て感じたことは、図画工作科は教師の工夫一つで、どんな子供でも目を輝かせて取り組むことができる素晴らしい教科だということだ。それはできあがった作品が上手にできているかといった視点ではなく、子供が材料と出会い、その材料に体全体で触れ、感じ、イメージを膨らませていく過程を大切にしているからだ。そこには自分の思いがあり、友達と共有できる喜びがある。図画工作科の研究実践で培った指導方法や教材教具の工夫・提示方法など、他教科へも反映できるよう努力していきたい。